

学業失敗場面での次への切り替えという  
精神的弾力性の検討  
—性格特性や対処様式を基に—

川原 誠司, 鈴木 美緑

宇都宮大学教育学部研究紀要 第70号 別刷

2020年3月



# 学業失敗場面での次への切り替えという 精神的弾力性の検討 —性格特性や対処様式を基に—

A study on resilience as switching to the next in academic failure:  
Based on personality trait and coping

川原 誠司<sup>†</sup>, 鈴木 美緑<sup>‡</sup>  
KAWAHARA, Seishi and SUZUKI, Minori

## 概要 (Summary)

本稿は、大学生が学業失敗場面でのどのようなことを感じ、それをどのように処理し、次に向けて動いていくのかという「次への切り替え」という精神的弾力性について検討する。失敗という事象の際に、それで挫折して終わりということでないことを考慮したいためである。“性格→失敗直後に生じる感情→生じた感情への対処→次回に向けての具体的行動→次回の成功期待”という性格特性や対処様式を考慮した因果モデルを検討するため、大学生を対象に質問紙調査を行い、性格、生じた感情、感情への対処、次回に向けての具体的行動の各々について尺度構成を行い、重回帰分析を行った。

結果として、「次回の成功期待」に直接影響を与えているのは、失敗時に生じた感情の「情緒不安定」（負の影響）や具体的行動の「計画的準備」であった。「計画的準備」に対しては、生じた感情の「後悔」や性格の「怠惰」（負の影響）、感情への対処の「気晴らし」が直接影響を与えていた。この他にも様々な関連性が見られた。次回の成功期待につながるように、それまでの各要素をうまく活かせるように配慮すると同時に、処理の仕方には全般的な傾向だけでなく個人差も考える必要性を感じさせた。

キーワード：失敗，次への切り替え，精神的弾力性

## 1. 問題と目的

### 1.1 人生における失敗という否定的出来事

人が生きていく上で失敗はつきものと言える。逆に言えば日常生活で失敗を全て避けることなど不可能でもある。当然、失敗など起きたくないと思っているし、そのために相応の準備をしたりもするだろう。しかし、当人の能力不足や準備不足のみならず、不可抗力の事象が起きたり、他所からの妨害が入ったりして、「うまくいかなかった」ということは生活の中で相当数起きる。

そこで、鍵となるのは「失敗が起きてからどのようにするか」ということになるだろう。例えば、失敗したことで挫折感に見舞われて何もなくなったり、失敗したことで否定的感情を他者に攻撃的にぶつけたりといった状態では改善にはつながらない。成功や失敗の際にどこに原因を求めると

<sup>†</sup> 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者1)

<sup>‡</sup> 宇都宮大学 教育学部卒業

いう見方は、Weiner et al. (1971) の帰属理論 (attribution theory) で分類されているが、原因帰属だけでなく次にどのように活かすかという方向性での検討が必要といえる。

### 1.2 失敗後の次への切り替えという精神的弾力性

失敗が不可避である以上、失敗から学ぶことも大事であり、失敗が起きてそれを克服し、次に活かすという姿勢や態度が必要となる。西村他 (2017) では、教育現場において本来教室は多くの失敗をする場所であり、失敗経験を肯定的に捉えて成功に結びつけることが推奨されている。また、畑村 (2005) では失敗は新たな創造の種となる貴重な体験であり、失敗を経験しそこから学ぶということは、個人が成長する大きなチャンスであると述べている。また、尾崎・上野 (2001) は、成功・失敗場面は個人によって多様な意味づけを持ち、必ずしもネガティブな影響を与えるとは限らないと述べている。スポーツ選手や研究者などの栄誉を得た人々の逸話などを通して、偉人の伝記においても必ず失敗や困難がつきものであることを我々は知っている。

以上のことから、失敗において挫折のみで終わらせずに次に活かす姿勢や態度が重要であり、このような姿勢や態度が、精神的弾力性 (レジリエンス) という人間成長上の強靱な側面を形成するといえる。本稿ではその精神的弾力性について「次への切り替え」と表現して、そのプロセスを探る。

次への切り替えのプロセスを探ることで、その全般的な傾向を見いだすことができれば、上手くない人への対応が検討しやすい。自分を否定しすぎたり、同じ失敗を不用意に繰り返してしまったりする等の悪影響を防げる可能性がある。

### 1.3 本研究の目的

本研究は、大学生を対象に失敗場面を呈示し、“性格→失敗直後に生じる感情→生じた感情への対処→次回に向けての具体的行動→次回の成功期待”といった性格特性や対処様式を組み込んだ次への切り替えの一連の流れを仮定し、次への切り替えに影響する要因について因果関係的に検討する。

失敗場面として今回は学業場面を想定した。失敗という状態が具体的に設定しやすく、大学生全体にわたって重要な側面であると推測できるからである。

## 2. 方法

関東地方にある X 大学の学生 319 名 (男子 160 名、女子 159 名) に質問紙調査を実施した。調査時期は 2017 年 10 月中旬 - 11 月中旬。

質問紙は以下のようなもので構成されていた。

### 2.1 失敗場面

池田・三沢 (2012) を参考に、「大学の授業の単位取得失敗」という失敗場面を呈示した。

この失敗場面を作成するにあたって 2 つの点に留意した。1 つは、失敗の帰属が様々なものに帰属できるようにした。例えば、難しすぎる試験でほとんど全員が単位取得できないという状況だと、試験や担当教員に原因帰属が偏る。一方で、自分が全く勉強しなかったという状況だと、自責の方向に偏りやすくなる。これらが可能なかぎり混在するようにする必要がある。

もう 1 つは、次への切り替えの余地を残すようにした。試験の結果に大きく依拠することで、次に

はそれを努力すればよいという点が明瞭になるようにした。また、単位を取得できた人とできなかった人が混在することで、単位が取得できた人のことを参考にする方向性があるようにした。学業場面であれば、呈示した授業のみならず（一度で終わりでなく）、別の学業場面という類似状況にも展開・適用できると考えた。

以上のことを踏まえて、「次のような失敗の場面が自分に起きたと想像してください」と教示した上で、下のような文章を呈示した。

あなたは大学である授業を履修していました。その授業の成績は、期末試験の点数でかなり決まります。そのため、試験前には少し勉強をしてその期末試験に臨みました。

成績表が返却され、それを見てみると、その授業の単位を落としていました。周りに話を聞くと、単位が取れている人も取れていない人もいました。

## 2.2 失敗直後に生じる感情

前記2.1の失敗を想起させた後で、「失敗が起きた直後、以下の感情をどの程度感じますか」ということで質問した。

奈須・堀野（1991）の感情語リスト59語の中の、失敗場面に関する項目を使用した。その中でも、失敗をすることで生じる一般的な否定的感情を表す「不愉快・困惑」、統制感の低さを表す「無能感」、努力不足を表す「後悔」、投げやりな気持ちを表す「あきらめ」の4つの下位尺度から抜粋した。

項目数としては、回答者の負担を減らすため、上記の4つの内容それぞれの因子負荷量の高い3項目ずつを採用し計12項目で構成した。回答者に分かりやすくするように文末を改変したものを一部含んでいる。

各項目について、5段階評定（5；とてもよく感じる－1；ほとんど感じない）で回答してもらった。

## 2.3 生じた感情への対処

前記2.2の感情を想起させた後で、「失敗をして間もない頃に生じた嫌な気持ちに対して、どのようにしますか」ということで質問した。

神村他（1995）のTAC-24（Tri-Axial Coping）の中から情動焦点型対処に関する項目を抜粋した。起きたことを楽観的に捉える「肯定的解釈」、嫌なことを考えないようにする「回避的思考」、趣味などによって気持ちを発散する「気晴らし」、誰かに話をきいてもらうことによって気持ちを落ち着かせる「カタルシス」の4つの下位尺度から抜粋した。

項目数としては、上記の4つの内容それぞれの因子負荷量の高い2項目ずつを採用し、計8項目で構成した。項目の中には、本研究の失敗場面に沿うように表現を一部改変したものもある（「賭け事」という表現を「娯楽」に変えるなど）。

各項目について、5段階評定（5；とてもする－1；ほとんどしない）で回答してもらった。

## 2.4 次回に向けての具体的な行動

前記2.1の失敗を想起させた後で、「近い将来、同じような試験を受ける機会があるとしたら、それに向けてどのような行動をしますか」ということで質問した。

2.3で触れた神村他（1995）の中から問題焦点型対処に関する項目を抜粋した。問題解決のために情

報を集める「情報収集」、問題解決をあきらめる「放棄・諦め」、問題解決のために計画的に行動する「計画立案」、原因は自分以外にあると捉える「責任転嫁」の4つの下位尺度から、それぞれの因子負荷量の高い2項目ずつを採用し、計8項目で構成した。項目の中には、本研究で呈示した失敗場面への回答を求めていることが分かるような表現を付加するなど改変したものもある。

各項目について、5段階評定(5:とてもする-1:ほとんどしない)で回答してもらった。

## 2.5 次回の試験での成功期待

前記2.1の失敗を想起させた後で、「近い将来、同じような試験を受けるとしたら、どの程度の成功が自分では期待できると思いますか」ということで質問した。

10段階評価であったが、10に「成功は非常に期待できる」、1に「成功は全く期待できない」という言葉を載せた以外は数字の段階のみを示し、回答者が自らの感覚で選ぶ形式にした。

## 2.6 性格

「あなたの普段の性格」という条件で質問した。並川他(2012)のBig Five尺度短縮版29項目の中から、失敗を否定的に捉える項目と関連すると考えられる「情緒不安定性」、失敗に対して他者の人の力を借りながら積極的に向き合うと考えられる「外向性」、失敗に対して真摯に向き合うと考えられる「誠実性」の3つの下位尺度から、因子負荷量の高い4項目ずつを採用し、計12項目で構成した。

その際、以下の2点について改変を行った。まず、「誠実性」については方向性を全て負に揃えた表現に改変して回答を求めたので、実際は「怠惰(誠実性の逆概念として想定されうるもの)」を測定している。次に、元の質問は全てが単語のみの表現であったが、本調査では回答者が性格として実感しやすいように、語尾に「～である」という表現を付加した。

各項目について、5段階評定(5:とてもあてはまる-1:ほとんどあてはまらない)で回答してもらった。

# 3. 結果

## 3.1 失敗直後の感情についての尺度構成

前提となる下位概念はあったが、より信頼性の高い尺度構成をするため探索的因子分析(最尤法、バリマックス回転)を行った(以下の因子分析も同様)。結果ならびに各項目の平均値と標準偏差をTable1に示した。

3因子構造で解釈可能となった。第1因子は「自信がなくなった」「自分は頭が悪い」のように自らの否定的側面が表現された項目ならびに「最悪だ」「ショックだ」のように失敗した状況に対する否定的感情の項目が集まっており、「自己否定」と命名した。

第2因子は「もっと○○」というような自分の努力不足を悔やむ項目が集まった。この因子は奈須・堀野(1991)と同様の項目が集まっており、「後悔」と命名した。

第3因子は「まあいいや」「こんなものだろう」というような失敗の状態にあまり向き合わない項目が集まった。奈須・堀野(1991)での「あきらめ」の因子と同様の項目が集まっていたが、本研究においては、次に向けて積極的でないという意味合いを込めて「投げやり」と命名した。

各因子に含まれる項目の素得点合計を各因子の尺度得点として、後の因果関係の分析に用いる。

項目の平均値を見ると「後悔」の全ての項目が相対的に高く、もっとできたはずという思いを持った人が多いことがうかがえる。「自己否定」の中では「ショックだ」「最悪だ」というように、失敗に衝撃を受ける項目が高くなった。これらとは対照的に、「がんばってもだめなんだ」という項目が2.30と最も低く、自分にできることがあったと思う感覚を比較的抱いていることが全体的にはうかがえた。

Table 1 「感情」の因子分析結果, 平均値, 標準偏差

	F1	F2	F3	M	SD
＜第1因子: 自己否定 $\alpha = .78$ ＞					
9. 自信がなくなった。	.83	.10	-.09	2.68	1.15
8. 自分は頭が悪い。	.64	.06	.02	2.88	1.18
6. 最悪だ。	.60	.21	.05	3.55	1.21
4. ショックだ。	.57	.29	.03	3.94	1.02
1. がんばってもだめなんだ。	.51	-.05	-.07	2.30	0.95
＜第2因子: 後悔 $\alpha = .84$ ＞					
3. どうしてもっとがんばれなかったのか。	.11	.83	-.10	3.71	1.06
10. もっとがんばればよかった。	.16	.81	.01	4.01	1.06
5. がんばればもっとやれたのに。	.08	.73	.05	3.75	1.05
＜第3因子: 投げやり $\alpha = .81$ ＞					
11. まあいいや。	-.09	-.05	.92	2.73	1.14
12. こんなものだろう。	-.08	-.05	.73	2.68	1.10
〔除外項目〕					
7. 情けない。	.52	.41	-.04	3.45	1.14
2. やっぱり。	.18	.25	.28	3.36	1.10
因子寄与	2.39	2.24	1.49	(寄与率 51.04%)	

### 3.2 生じた感情への対処についての尺度構成

因子分析(最尤法, バリマックス回転)の結果ならびに各項目の平均値と標準偏差を Table2に示した。

3因子構造で解釈可能となった。第1因子は当初の概念であった「カタルシス」と同じ2項目が集まった。ただ、「カタルシス」という命名だと心理療法的な色彩すら帯びるおそれがあるので、「誰かに話を聞いてもらい」という表現を活かして「他者への発散」と命名する。

第2因子は、「今後は良いことがあるだろう」のように楽観的な思考を表した項目や「買い物や娯楽、おしゃべりなどで時間をつぶす」のように好きなことをして気持ちを発散する項目が集まった。神村他(1995)の「肯定的解釈」と「気晴らし」に関する項目が合併しており、本研究では「気晴らし」と命名した。自分なりに行える気持ちの整理の仕方ということでまとまったものと考えられる。

第3因子は、「失敗したことをあまり考えないようにする」のように、失敗したことに向き合わず、その事実を別に置くという項目が集まった。神村他(1995)では「回避的思考」という命名がなされていたが、本研究では失敗の事実を眼前に置かないという点を重視し「棚上げ」と命名した。

各因子に含まれる項目の素得点合計を各因子の尺度得点として、後の因果関係の分析に用いる。

平均値については、全ての項目が理論的中央値の3.00前後となっていた。「棚上げ」の項目が若干低い傾向にあり、全体的には棚上げすることよりは積極的な感情対処をしているように感じられる。

Table2 「感情への対処」の因子分析結果, 平均値, 標準偏差

	F1	F2	F3	M	SD
＜第1因子; 他者への発散 $\alpha = .90$ ＞					
5. 誰かに話を聞いてもらい、気を静めようとする。	.97	.14	.03	3.16	1.28
1. 誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す。	.82	.09	.08	3.08	1.19
＜第2因子; 気晴らし $\alpha = .74$ ＞					
4. 今後は良いこともあるだろうと考える。	.06	.74	.10	3.08	1.17
7. 失敗をすることは悪いことばかりではないと、楽観的に考える。	-.06	.68	.24	2.94	1.13
3. 好物を食べたり飲んだりする。	.23	.54	.18	3.11	1.21
8. 買い物や娯楽、おしゃべりなどで時間をつぶす。	.29	.47	.18	3.16	1.22
＜第3因子; 棚上げ $\alpha = .77$ ＞					
2. 失敗したことをあまり考えないようにする。	-.01	.20	.79	2.73	1.03
6. 失敗したことを頭に浮かべないようにする。	.16	.25	.73	2.73	1.04
因子寄与					
	1.79	1.65	1.29	(寄与率 59.19%)	

### 3.3 次回に向けての具体的行動の尺度構成

因子分析(最尤法, バリマックス回転)の結果ならびに各項目の平均値と標準偏差を Table3 に示した。

3因子構造で解釈可能となった。第1因子は「次に失敗するかもしれないと考え、その失敗を人のせいにしてしまう」というような、自分自身で責任をとらないという項目ならびに「前回の失敗を自分では手に負えないことと考え、次に向けた行動を放棄する」のように、問題と向き合わずに行動を諦める項目が集まっている。神村他(1995)でいうと「放棄・諦め」と「責任転嫁」が合併したまとまりである。このことについて、放棄・諦めの部分について、「失敗の要因を自分の外側に置く」という意味合いであることを考え、本研究では「責任転嫁」と命名した。

第2因子は、「うまくいった人に教えを受けて解決しようとする」のように、問題解決に向けて参考となる他者から情報を収集するという項目が集まった。神村他(1995)の「情報収集」と同じ項目が集まったが、「人から」情報を集めるという要素を含むことを加味して、本研究では「対人的情報収集」と命名した。

第3因子は、「次に向けてどのような対策をとるか綿密に考える」のように、問題解決に向けて計画を立てて行動しようとする項目が集まった。神村他(1995)の「計画立案」と同じ項目が集まったが、「次に向けての準備」という点を重視して、「計画的準備」と命名した。

各因子に含まれる項目の素得点合計を各因子の尺度得点として、後の因果関係の分析に用いる。

平均値については、「責任転嫁」の項目が大分低い傾向にあり、その一方で「対人的情報収集」ならびに「計画的準備」の項目はすべて3.50を超えていた。全体的には自分のこととして何らか解決する方向に評定がなされているように感じられる。

Table3 「次回への具体的行動」の因子分析結果, 平均値, 標準偏差

	F1	F2	F3	M	SD
＜第1因子; 責任転嫁 $\alpha = .77$ ＞					
3. 次も失敗するかもしれないと考え、その失敗を人のせいにしようとする。	.79	-.07	-.04	1.77	0.89
5. 次も失敗するかもしれないと考え、その原因は自分にはないと考えようとする。	.77	.05	.05	1.95	0.93
8. 前回の失敗を自分では手に負えないことと考え、次に向けた行動を放棄する。	.65	-.02	-.26	1.79	0.90
2. 前回の失敗を対処できない問題だと考え、次に向けた行動を諦める。	.48	-.05	-.19	2.19	1.05
＜第2因子; 対人的情報収集 $\alpha = .88$ ＞					
7. うまくいった人に教えを受けて解決しようとする。	-.02	.99	.17	3.61	0.99
4. うまくいった人から話を聞いて参考にする。	-.03	.76	.22	3.57	1.03
＜第3因子; 計画的準備 $\alpha = .67$ ＞					
6. 次に向けてどのような対策を取るべきか綿密に考える。	-.06	.28	.71	3.64	0.95
1. 前回の失敗の原因を検討し、どのようにしていくべきか考える。	-.19	.11	.66	3.89	0.88
	因子寄与	1.92	1.65	1.11	(寄与率 58.44%)

### 3.4 性格の尺度構成

因子分析(最尤法, バリマックス回転)の結果ならびに各項目の平均値と標準偏差を Table4 に示した。

3 因子構造で解釈可能となった。並川他 (2012) の先行研究と同じ項目のまとまりとなり, 第1 因子は「情緒不安定」, 第2 因子は「外向」, 第3 因子は「怠惰(誠実性の逆概念として取り扱う)」と命名した。

各因子に含まれる項目の素得点合計を各因子の尺度得点として, 後の因果関係の分析に用いる。

平均値については, 「情緒不安定」について4 項目中3 項目が3.50 を超えており, 不安に関して高い数値を示していることが分かる。これらの不安が失敗場面で多くの人に何らかの影響(特に否定的影響)をもたらすことが予想される。

Table4 「性格」の因子分析結果, 平均値, 標準偏差

	F1	F2	F3	M	SD
＜第1因子; 情緒不安定 $\alpha = .85$ ＞					
8. 不安になりやすい。	.91	-.03	.03	3.60	1.11
9. 心配性である。	.82	.01	-.12	3.65	1.07
3. 弱気になりやすい。	.73	-.24	.13	3.28	1.15
1. 緊張しやすい。	.57	-.15	.09	3.80	1.05
＜第2因子; 外向 $\alpha = .84$ ＞					
12. 陽気である。	-.17	.80	.01	3.21	1.12
4. 社会的である。	-.12	.79	-.12	2.97	1.04
11. 話好きである。	.05	.76	-.01	3.43	1.11
6. 積極的である。	-.15	.64	-.01	2.93	0.99
＜第3因子; 怠惰 $\alpha = .81$ ＞					
10. いい加減である。	.10	-.06	.80	3.41	1.12
5. ルーズである。	-.04	-.02	.75	3.30	1.14
2. 成り行きまかせである。	-.09	-.03	.67	3.49	0.97
7. なまけやすい。	.16	-.01	.63	3.67	1.04
	因子寄与	2.48	2.32	2.12	(寄与率 57.60%)

### 3.5 次回の試験での成功期待の得点分布

10段階評定の平均値は7.27, 標準偏差は1.45であった。分布を詳細に見るために各評定値の度数分布をTable5に示した。評定値7と8で全体の60%を超えており, 全体的にはうまくいくだらうと期待する傾向にあることが分かる。しかし, 6以下の評定も20%を超えており, 一定割合の回答者が次回もそれほど期待できないという思いを抱いていることがうかがえる。

Table5 次回の試験での成功期待の得点分布

評定値	度数	パーセント
1	0	0.0%
2	2	0.6%
3	5	1.6%
4	10	3.1%
5	10	3.1%
6	47	14.7%
7	100	31.3%
8	96	30.1%
9	30	9.4%
10	19	6.0%
	319	100.0%

### 3.6 因果関係の分析

3.1から3.5の各尺度を用いて因果関係を検討する。仮定するモデルとしては, “性格→失敗直後に生じる感情→生じた感情への対処→次回に向けての具体的行動→次回の試験での成功期待”というものである。つまり各人の持つ性格が失敗場面での感情生起やその対処, 次への行動に影響し, 次回への期待につながるという流れである。

各段階を考えて逐次重回帰分析を実施したところ, Figure1のような結果になった。最終段階の「次回の成功期待」に直接の影響を与えたものは, 次への具体的行動の「計画的準備」( $\beta = .28$ )と性格の「情緒不安定」( $\beta = -.25$ )であり, その「計画的準備」に影響を与えているのは, 「後悔」( $\beta = .24$ )と「怠惰」( $\beta = -.22$ ), 「気晴らし」( $\beta = .16$ )であった。

「計画的準備」と同じ水準の「対人的情報収集」については, 「他者への発散」( $\beta = .19$ )と「気晴らし」( $\beta = .17$ ), 「怠惰」( $\beta = -.15$ ), 「後悔」( $\beta = .12$ )から影響を受けていた。

「他者への発散」には「外向」( $\beta = .23$ )と「情緒不安定」( $\beta = .18$ ), 「後悔」( $\beta = .11$ )が影響し, 同水準の「気晴らし」には「外向」( $\beta = .34$ ), 「自己否定」( $\beta = .19$ ), 「投げやり」( $\beta = .19$ ), 「怠惰」( $\beta = .13$ )が影響していた。

「自己否定」と「後悔」については「情緒不安定」から影響を受けていた(「自己否定」 $\beta = .46$ ; 「後悔」 $\beta = .29$ )。

## 4. 考察

### 4.1 性格が及ぼす影響

性格についてはBig Fiveの中から3つのものを選んで分析に用いた。「情緒不安定」について, 失敗

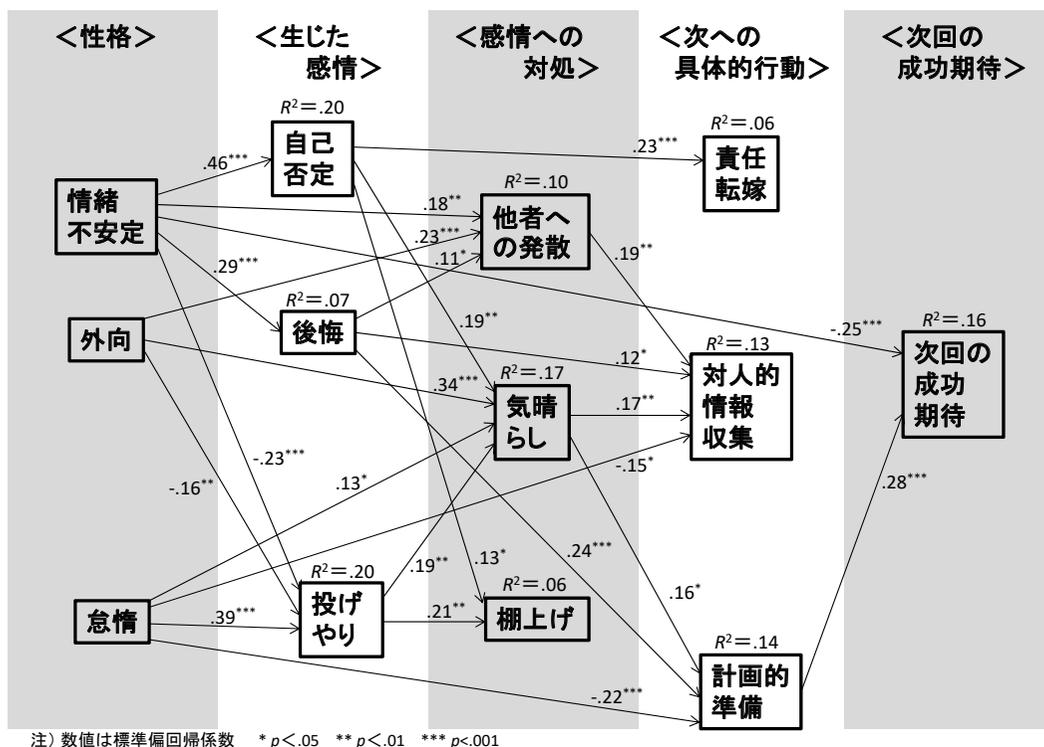


Figure 1 学業失敗場面での次への切り替えの因果関係の分析結果

時の感情としての「自己否定」に対して強い影響をもち、また「後悔」にも相応の影響があった。不安になりやすい人は失敗の場面で自らの問題点を多く想起しやすい傾向にあると思われる。また、最終段階の「次回への成功期待」に対しても直接の負の影響を与えていた。不安に囚われることの問題を強く示していると思われる。Table4の項目の平均値においても「情緒不安定」が相対的に高くなっていることは先述したとおりであるが、大学生の多くにとって失敗という事象を考えるに鍵となる要因であり、適切なコントロールの必要があるものと思われる。

「外向」については、感情への対処の「他者への発散」「気晴らし」という外に表す感情対処に影響していることが分かる。対人的な相手だけでなく、“外に出せること”に寄与していることがうかがえる。

「怠惰」については、生じた感情の「投げやり」に影響していた。また、次への具体的な行動の「計画的準備」「対人的情報収集」には負の影響があった。怠惰に関しては、次への切り替えという点に関してその積極的動きを遠ざけやすいものであることがうかがえる。

#### 4.2 生じた感情というエネルギーの処理

「自己否定」や「投げやり」の感情は「気晴らし」と関連し、何らかの処理に向かう方向にあるが、同時に「棚上げ」にも影響している。この棚上げへの影響については、程よく棚上げして否定的感情を悪化させないという可能性もあるが、同時に直面化を避け前向きな方向からは遠のきやすくなってしまいう危険もある。

「後悔」は「計画的準備」や「対人的情報収集」の次への具体的な行動に影響している。もちろん後悔は

過度になってしまえば悪影響になってしまうと思われるが、程よく感じることは前向きな行動への切り替えに影響できる可能性があると思われる。

#### 4.3 最終的な目的である「次回の成功期待」という次への切り替えにつなげるために

今回の成功期待に直接的に影響を与えていたのは性格の「情緒不安定」と次への具体的行動の「計画的準備」であった。「情緒不安定」は成功期待に直接的に悪影響をもたらしているが、同時にその心配性が「後悔」につながり、「計画的準備」へ影響している部分もある。不安定感に囚われることなく次に次のエネルギーにつながる後悔のほうに振り向け、準備につながれば、「次回の成功期待」に好影響をもたらす可能性が示唆されている。

「計画的準備」が「次回の成功期待」に肯定的影響をもたらしているという結果から、「計画的準備」に影響を与える「後悔」「気晴らし」「怠惰」といったものが次への切り替えの際にとりわけ鍵となる要素であると考えられる。

#### 4.4 実践的含意と次への切り替えの個人差のさらなる検討に向けて

因果関係の分析から、実際の介入の際に個人差を考慮すべきことが見えてきた。性格からの影響を考えると情緒不安定性を有している人と、怠惰を有している人には異なる働きかけが必要と考えられ、例えば、不安の高い人にはあまり否定的になりすぎないような配慮が必要で、適切な後悔や気晴らしに振り向けることで計画的準備への方向に流れるように支援する必要がある。その一方で、怠惰の高い人は投げやりや棚上げに過剰に向かわないようにし、計画的準備に悪影響を及ぼさないようにより現実的な直面化や対人的接触が必要なことがうかがえた。その他、今回の因果関係として明らかになった繋がりを部分的な関係でも実生活の中で活かすことができるだろう。

本研究は大学生を対象にしたが、このような面は児童生徒にとっても援用可能と思われる。教室での社会情緒的な支えによる、まちがうことへの大切さを伝える絵本もある（蒔田・長谷川，2004）。学校教育における子どもの失敗場面に対して教師が働きかける際にも重要な視点であると言えよう。

全ての人に同一の因果関係が想定できればよいが、感情処理の仕方や意識の流れには個人差があり、様々な道筋があると考え、重回帰分析での説明率が高くないのはこの差に起因しているとも思われる。例えば、「対人的情報収集」のような具体的行動が、“自分で改善するために十分活かす”のか“依存的に聞いてみる”のかは、回答者の意識によって異なるだろう。また、「自己否定」のような感情が気晴らし等でうまく処理し次の準備に向かうか、責任転嫁したまま自分で行動を起こさないかは回答者の態度によって異なるだろう。

全体的な傾向を見ることのできる説明率上昇のための項目の更なる洗練とともに、このような個人差や傾向差も検討していく必要があるだろう。

## 文献

池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, 60, 367-379.

畑村 洋太郎 (2005). 失敗学のすすめ 講談社

神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの

- 検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 蒔田 晋治(作)・長谷川 知子(絵)(2004). 教室はまちがうところだ 子どもの未来社
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之(2012). Big Five尺度短縮版の開発と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 奈須 正裕・堀野 緑(1991). 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, 39, 332-340.
- 西村 多久磨・瀬尾 美紀子・植阪 友理・マナロ エマニュエル・田中 瑛津子・市川 伸一(2017). 学業場面に対する失敗観尺度の作成 教育心理学研究, 65, 197-210.
- 尾崎 仁美・上野 淳子(2001). 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響——成功・失敗経験の多様な意味—— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, 63-87.
- Weiner, B., Frieze, I.H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R.M. (1971). Perceiving the causes of success and failure. In E.E. Jones, D. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey: General Learning Press.

## 付記

本稿は、第2筆者が第1筆者の指導の下に作成した卒業論文の調査を基にしている。第2筆者の了承を得て、本稿の題名や構成、文章記述等については全て第1著者の責任において再構成し、第2筆者と協議した上で完成し、投稿資格の都合もあり第1著者を責任発表者としている。なお、本稿の概要については、日本心理学会第82回大会において発表した。

令和元年10月1日受理





**A study on resilience as switching to the next  
in academic failure:  
Based on personality trait and coping**

**KAWAHARA, Seishi and SUZUKI, Minori**